

身をたな知りて 波
の音の騒く湊の奥
つ城に妹が臥やせる
遠き代にありける
ことを昨日しも
見けむがごとも 思
ほゆるかも
九・一八〇七番歌)

火に集まるように、港に船が次々と入つてくるよう、に男が言い寄ってきたのである。ところが、それほど長く生きられるわけでもないのに、手児奈は「身をたな知りて」（わが身を思い知つて）入水してしまつたのである。反歌には「真間の井」として、手児奈がいつも水を汲んでいた「井」が縁として詠われてもいる。

気を付けて
日々を大切に
圓滿にお暮し下さい

甲羅に似ている事と、白い花が仮具の仮子に似ている事からこの名前があります。ハグマとは仮具の仮子を使われている動物のヤクの白い毛のことを云います)

白い花を見る

と二つの花に見えますが、よく観察してみると、小さな花が三つ集まって形成しています。葉の形は、ほぼ五角形で亀の甲羅のよう見えます。

キツコウハグマは閉鎖花が多くため白く開花する花はないので、冠毛ができると目立つ山野草です。

冠毛は地味な茶色ですが、開いた繊細な毛は味わいがあります。

稲荷山コースを登ってきて、高尾山頂への階段や四号路あたりに見られるでしょう。

花の色が白いですが、草丈が低いので中々見つけ難い花の一つです。



厄年を過ぎ
御信徒の皆様へ

四季の草花



先回まで「万葉集」の「浦島子」が「浦島太郎」として御伽草子や、さらには国定教科書などにも採録され、広く享受されたことを記してきた。今回ことは、「万葉集」の巻三と巻九に載る「真間手児奈」の歌を取り上げ、手児奈伝説が、文学史の中などでどのように扱われているかをみてみたい。まずは、作品を掲げる。

かつか
葛飾の真間の娘をなす
子が墓に過ぎる時に
山部宿禰赤人が
作る歌一首「并せて短歌 東の俗語に云ふ かづしかのままで」

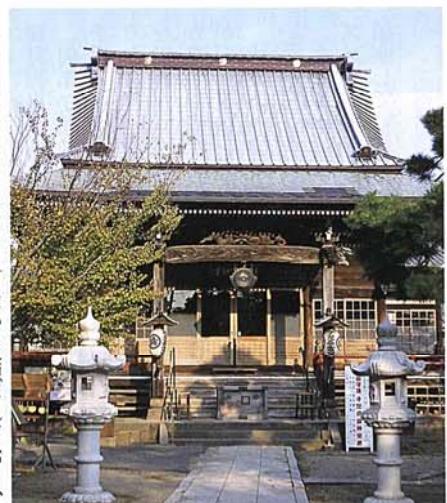
（卷三・四三二番歌）
葛飾の
眞間の手児名が
奥つき處
人にも告げむ
葛飾の
眞間の入江に
うちなびく
たまも
玉藻刈りけむ

「ゴナ」と呼称している。作者「山部宿禰赤人」は都の官人であり、何かしらの用件でこの地を訪れた際に、地元の手兒奈伝説を歌に詠んだといえよう。

居に簡易な住居のこと

来て、手兒奈伝説を知つたのだと考えられる。歌を見てみよう。

題詞にみえる「葛飾の真間」は、現在の千葉県市川市真間のことを目指している。そもそも「真間」は崖を意味する言葉で、千葉県市川市真間付近の国府台の南側にある崖下とされる。「葛飾の真間」とされる娘子」とは、この真間の



手児奈を祀る真間山弘法寺

真間手鼎奈 その1

獨協大学特任教授 城崎 陽子

『万葉集』から見る 日本の古典

手児名し思ほゆ
(卷三・四三三番歌)